

## 1.はじめに

「富山の薬は富山でなければならぬ」というのが富山県民の思いである。ではなぜ薬は富山なのか、他の地域でも本来はいいはずである。このように考えると製薬のルーツを知りたくなるのは当然である。たまたま、製薬について種々調べるチャンスがあったので、ならばレポートしようと決め本稿を書いてみた。

論点は、製薬技術、製薬原料、販売システムであり、これらが富山の薬を特徴付けたとして展開する。

## 2. 富山の風土

あちこちで私目「富山はこうです」と言い回っている。

### 2.1 自然環境

富山では3000m級の山脈と深度1000mの富山湾トラフがあり、平野は割合狭く扇状地地形をなしている。また、高さ方向には温帯から寒帯までの幅広い気候帯があり、豊富な降水により森林を含め一大穀倉地帯が形成されている。



### 2.2 産業

産業といえば、昔から、農業、薬業がある。地理的にいえば、日本(列島)の中心は富山である。この富山が日本海交易には地の理ということで一番適しており、米を交易品に出来るほど裕福な地ということもできる。

実際、日本海交易として富山からは米を北海道に、逆にニンシや昆布が富山に来ている。富山は地元の幸に加えて北の幸にもめぐまれ、そのおかげで食材が豊富といえる。(なお、富山米について：富山米が美味しいから北海道に渡ったのではなく、実際には北海道でしか売れなかったから。米騒動発祥の地が富山であった要因のうちのひとつといわれている)

## 3. 富山の薬

### 3.1 富山、製薬の発展

製薬には原料と技術が必要である。富山は両方の要因をうまくクリアしたからこそ発展したものといえる。

- ・技術については、諸説あり、立山の修験者が持っていた薬(今でいう薬かどうかは不明)が技術的下地となったとか、戦国時代に火薬製造などで薬技術の下地あったとかいう説があるが、詳しいことは分かってはいない。

- ・薬の原料について、和漢薬の原料(漢薬)はもともと日本にはなく、中国から輸入に頼っていた。これは富山にとっては好都合であった。北前の交易が薬の原料調達に一役買っていたからである。

- ・技術について。製薬には原料に加えて製薬技術が必要であり、富山藩前田公が1683年に岡山から技術者(万代常閑)を呼び、薬「反魂丹」が生産されるようになった。これが、富山の薬のルーツである。

- ・富山の薬が全国的シェアをえるようになったのは、独特な販売方法のおかげである。これにはかつての修験者が全国各地に越中物を配っていたシステムがそのまま利用され、かつ近世になってから「先用後利(先に使用し後払い)」の制度で固定の顧客が全国に確保されるに至った。繁栄はその時からである。

### 3.2 世にデビュー

富山藩前田公が江戸城で大名の腹痛に使ったことにより世に広まったとされている富山の薬伝説は、多分に後世の作り話という。富山の経済基盤が磐石であったのは、加賀藩に属していたおかげであるが、そうした話が富山の薬に必要なということだけは間違いなさそうである。

### 3.3 交易：北前船交易

交易について、(北前の)交易ルートは加賀藩の交易の一環として加賀藩の富山から北海道までであり、富山からは米が輸出され、北海道の海産物が輸入されていた。実際の交易の現場である湊については、加賀藩の湊である岩瀬(富山市北)は大変にぎわい、富山藩の湊である水橋(富山市東)は貧相であったといわれている。(加賀藩内にある富山地域のごく一部が富山藩)

一方、富山から西へのルートについては、若狭からの陸路により京や大阪へつながるルートと、下関経由で大阪まで行く海上ルートがあった。両ルートとも盛えていた。

### 3.4 薩摩による密貿易

薬業の社会性の研究によれば、薩摩は清との密貿易をしており、

清→琉球→薩摩→新潟・・・→富山

のルートで漢方薬原料が国内に入り、最終到着地が富山であり、中継地に大阪があったという。富山が薬都は当然であるが、中継地大阪も荷下ろし場として、薬種中買仲間が店を出して製薬が始まった。大阪の道修町がそうであり、武田薬品(1781年)や塩野義製薬(1878年)の発祥の地となっている。

### 3.5 薬産業

富山藩は薬の専売による巨万の富を得たとされ、本家(加賀藩)をしのぐ財力を持つに至っている。例えば、幕末期1861-1864の4年間で20万両(今の240億円)の売り上げであったという。

## 4. 今後の富山の薬、まとめとして

西洋医学重視政策により1870年「売薬取締規制」が制定され、富山の薬が大幅な規制を受けるようになった。その後、1943年と1948年の薬事法を経て製薬の完全オート化の要件が富山ではクリアされるに至り、1960年の薬事法で売薬(富山の薬)が業としてやっと認められた。が、苦難の歴史が今も続いている。また先用後利のシステムが時代に取り残されざりみである。このように、富山の薬はいままさに正念場にあるといえる。